

## かほくの特産品を作り出す人々

教員名：浅見洋、和田五月

参加学生：梅本雅、太田翔子、大宮優佳、奥田明日香、奥野しおり、小椋美穂、勝沼有加

### 1. 地域活動の概要

かほく市とその周辺の特産品を知るために「JA かほく」で聞き取り調査を行い、特産品マップを作った。そうした特産品づくりの活動を行っている人々の活動を体験しようとしたが、6月中旬から下旬にかけて収穫される農業特産品は非常に少なかった。そこで、若干対象地区と広げ7人を3つのグループに分けて活動した。第1グループは「『地産地消』を目指す人々」をテーマに「石川県砂丘地試験場」、「荷方漬けを製造する主婦グループ」、「鉢伏ブルーベリー園」、第2グループは「道の駅でかほくの特産品を売る人々」をテーマで「内灘サンセットパーク」、「ブラウン・スイス牧場」、第3グループは「夢ミルク館・ホリ牧場で働く人々と衛生管理」とテーマで「夢ミルク館」、「ホリ牧場」で体験実習を行い、各々の場での特産品作りを体験した。

### 2. 地域活動の目的

地域産業の活性化を農業という視点から見た時、その地域特有の特産品作りは非常に重要な地域課題である。かほく市とその周辺にも特産品作りを通じて地域の活性化に携わる人々が数多くおられる。そうした人々は看護者と同じように「地域と地域に住む人々のために何かをしたい」というひたむきな思いをもって日々の仕事に従事しておられる。将来「人々のために何かをしたい」という思いで看護学を学ぶ学生として、そうした人々の思いに触れると同時に、この地域で生活する学生として地域の特産品作りに関わる方法を探ることを目的とする。

### 3. 地域活動の具体的な内容

#### (1)かほくの特産品を知る（全体ワーク）

- ・かほく市・河北郡の特産品をそれぞれがインターネットなどで調べリストを作った。
- ・JA かほくの農業や特産品、販売活動について話を聞いた。
- ・体験フィールドについて調査した。
- ・各自の特産品情報を集約して特産品マップを作った。



## (2)第1グループ：『地産地消』を目指す人々

6月24日

- ・午前中は「石川県砂丘地農業試験場」で場長：高瀬裕章さんから話をうかがい、砂丘地であるかほくに適した野菜や果物の品種改良の関する話を聞いた。最近話題の葡萄ルビーロマン、スイカ、源助大根、かほっくりなど、特産品ができあがる過程についてお話をうかがうと同時に、ルビーロマンの原木やスイカの品種改良現場を見学した。
- ・午後は内日角公民館で荷方漬を作っている6人の地元主婦グループ「いなほ」の方々と荷方漬を作った。荷方漬は摘果メロンの粕付けで、メロンの栽培農家の方々が作り始めた。荷方とは昔河北潟で荷を運んでいた人たちのことであり、JAのスーパーで販売している。

6月25日

元県庁職員だった長田太陽さんが自分の田だった土地を利用して定年退職後に始めた「鉢伏ブルーベリー園」を訪問、この地区でブルーベリーを育てようとした動機、目的、苦労などをうかがい、ブルーベリー摘みなどを行った。



農業から見た地域の活性化は、農作物を作る人、加工する人、販売する人等多くの人々の協力から成り立っていた。1つの特産品を作るのにも多くの人に関り、品種改良実験をしたり土地柄を考えるなど、さまざまな試みと努力を積み重ねていた。それぞれの特産品作りに、それによって市がもっともっと活性化してほしいという願いが込められていた。

## (3)第2グループ：道の駅でかほくの特産品を売る人々

6月25日

かほく潟やその近隣でとれた特産品を売っている道の駅「内灘サンセットパーク」を実習先とし、そこで販売されている特産品と特産品を普及させるためにどのような工夫をしているかを調べた。①主に河北潟の牧場で取れた牛乳を使った製品を販売していること、②地域の人たちが作った花、野菜などを販売していること、③アカシヤ蜂蜜を取り扱っている店も入っていることなどが確認できた。また、販売、接客のマナーについても体験的に実習した。

6月26日

- ・午前は「内灘サンセットパーク」店長に道の駅を開設した動機や仕事上の苦労、今後の希望などをインタビューし、道の駅の乳製品などを生産している牧場「ブラウンスイス」を見学した。ブラウンスイスとはその牧場で飼育している乳牛の名前である。
- ・午後は再び「内灘サンセットパーク」で接客を体験した。



道の駅サンセットパークで作られている「白い大判焼き」には道の駅の店長が経営する牧場ブラウンスイスの牛乳が使用されている。その他、道の駅にはかほくで作られた野菜、果物、お花などが販売されている。販売の接客態度も学んだ。

#### (4) 第3グループ：夢ミルク館・ホリ牧場で働く人々と衛生管理

6月24日

夢ミルク館の仕事を体験した。夢ミルク館はホリ牧場直営のソフトクリーム、マフィン、牛乳の直販所があり、そこでの販売品を作った。また、裏には牛、羊、ポニー、うさぎなどと触れ合うことができる牧草地があり、そこで小動物たちの世話をした。ここは地元の人々の触れ合いの場であると同時に、癒しの場でもあったと感じた。

6月25日

ホリ牧場に宿泊し、6時から牛舎の掃除、搾乳、餌やり、世話など牧場の仕事を体験した。午後には牛の人工授精や子牛の点滴などを見学する機会があった。ホリ牧場は約80年前から、約50haの牧草地と500頭近くの乳牛を飼育有機無農薬・非遺伝子組替飼料を基本と育てており、地域の人々に安全、安心な乳製品を提供している。



人形焼き「モウモウちゃん」にはホリ牧場の牛乳が使われている。夢ミルク館は、現代人にもっと牛乳に親んでもらい、牧場ののどかな風景と動物たちに心を癒してもらいたいという目的を持っていた。誰かに喜んでもらえることが自分自身の喜びとなり、仕事への意欲に繋がる。

#### 4. 地域活動の評価（学生評価）

(第1グループ)

- ・農業から見た地域の活性化は、農作物を作る人、加工する人、販売する人等多くの人々の協力から成り立っていた。地域で作られたものを外へと広げていくことも大切ではあるが、地域で作られたものを地域で消費していくことも、地域活性化のためには重要なことである考える。
- ・1つの特産品を作るのに多くの人に関っており、品種の実験をしたり土地柄を考えたりと、簡単にできるものではないことを知り、誰もが本気で取り組んでいると感じた。また、品種の実験は年単位で行うので時間もかかるし、根気もいる。普段何気なく物を食べていますが、もっと感謝の気持ちをもとうと思おもらった。
- ・両日、訪問した先の方々の根底にある思いは、「地産地消」だった。それぞれ、自分たちが作っているものがかほく市の特産品となり、それによって市がもっと活性化してほしいという願いが込められていることが分った。

(第2グループ)

- ・農家の人が作った農産物も売っていたので、特産品だけでなく時期によってかほくでとれるものを作ることができた。また、外に置いてある花の世話や環境整備にも力を入れていて、より多くの人に訪れてもらい、地元産を広めようとする努力が感じられた。
- ・ソフトクリームの販売量の石川県No.1をめざしていたり、白い大判焼きなど、流行りをいち早く取り上げて独自のものにしたりと、お客様に物を売ることに対して、とても一生懸命で、積極的であると感じた。

(第3グループ)

- ・食品を扱う仕事上、1回の手洗いは2度しっかり行ったり、1度使った手袋は2度使わないな

「看護大学におけるフィールドワーク型初年次教育の充実」事例実施報告書

ど、衛生面への意識は高く、徹底されていた。牛舎の掃除をしながら糞や毛の状態を観察し、牛の健康状態をチェックしてた。命をあずかる者に観察力は不可欠であり、その能力は経験をつむことで高まっていくのだと感じた。

接客では、お客様に気持ちよく帰っていただくために笑顔で接し、対象とする相手やその時の状況によって、適切な態度や行動が要求された。ちょっとした気配りであっても、それに気がついて行動に移すのは難しいと感じた。夢ミルク館は、現代人にもっと牛乳に親しんでもらい、牧場ののどかな風景と動物たちに心を癒してもらいたいという目的を持っており、社会に貢献していると思う。

誰かに喜んでもらえることが自分自身の喜びとなり、仕事への意欲に繋がると感じた。

## 5. 今後、この地域活動を継続、啓発していくために必要なもの及び課題

今後、学生が地域の特産物作りに関わっていくためには今回実習した学生たちの関心を途絶えさせないようにすること、特産品作りに関わってきた人々との交流を続けて行く必要がある。学生の関心を維持し高めていくために、10月末の看護大学祭に学生たち中心に地域の特産品の紹介、販売を行う予定である。そのためには、より多くの学生の協力とともに、今回実習したフィールド以外で特産品作りと関わっている人々とコンタクトをもつ必要がある。特に秋に収穫時期になる紋平柿、かほっくり、ジネンジョなどの生産者と関わりを持つ必要がある。またそれらに関する新しい商品開発にどのように学生を関わらせるかが課題である。

## 6. その他

学生活動の一環としてかほくの特産品を地域内外に紹介するようなイベントや講演会などが開催できるといいと思う。さらに、地域で行われる秋の収穫祭や各紙で行われる秋祭り、バザー等へ学生が参加するようになればとも考えている。